

私たちは、 AIと何をつくっていくのか。

自分の目的と経験から始める
人間とAIの協働原則



大きな目標がなくても、
自分の一仕事から始められます。

あなたは、AIを使って**何を実現したいですか。**

早く終わりたい。 どこで時間がかかっている？

会議資料をつくる場面で考えてみます。

AIと資料をつくる

資料ができた。

修正の依頼が届く

「何月の数字ですか？」

確認して、つくり直す

数字の期間を調べ、
資料を直す。

資料をつくる時間だけを見ても、
仕事全体の時間は分かりません。

作る時間だけでなく、**確認や修正の時間**も見る。

何をしたいか。 なぜ、そう考えるか。

いま分かることから、
目的と**背景**を整理します。

目的

何を実現したいか

やり直しを減らし、
早く終わりたい。



背景

その理由と、成り立つと考える条件



確認した事実

「何月の数字ですか?」と修正依頼が届いた。



原因の見立て

作る前の確認が足りなかったのかもしれない。



確かめたい条件

必要な期間を、作る前に確認できるか。

まだ曖昧なところは、
AIとの対話でも整理します。

目的も、その理由も、**確かめながら見直す。**

自分の経験を、 AIと次の仕事につなぐ。

一度で答えを決めず、
必要なところへ戻りながら進めます。

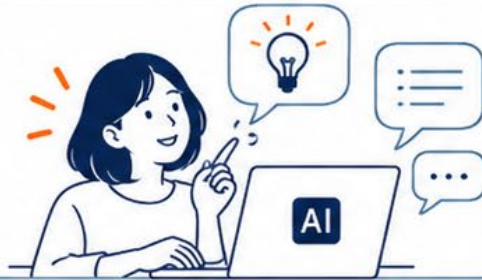
目的と背景を出す

何をしたい？
何が起きている？



AIと考える

どんな案がある？
ほかの見方は？



結果から見直す

実際にどうだった？
次は何を続け、変える？



確かめて、決めて、進める

根拠と条件を確かめる。
進め方と、任せる範囲を決める。



目的や進め方に迷ったら、前の段階へ戻ります。

AIとの対話と、実際の仕事を**行き来**する。

早く終わりたい。 守る条件も、はっきりさせる。

自分の目的と、
仕事で満たす条件は分けて置きます。

自分の目的

やり直しを減らし、
早く終わりたい。



!!!
どちらも
大切です



仕事の条件と範囲

比較できる数字をそろえる。
期限と情報の扱いを守る。
どこまで担うかを確かめる。



一人で抱えない

両立が難しければ、期限・範囲・支援を相談する。
依頼する側も、必要な情報・時間・相談先を用意する。



「早く終わる」と「条件を満たす」を、**一緒に考える。**

事実と、 自分の説明を分ける。

同じ修正依頼でも、
何が分かり、何がまだ分からないかを分けます。

事実

確認したこと



「何月の数字ですか？」
という修正依頼が届いた。

見立て

自分が考えた説明



作る前に、必要な期間を
確かめていなかったのかもしれない。

未確認

まだ分からないこと



どの期間の数字が必要か。
依頼時に、何を確認していたか。

見立ては、確かめ直すための仮の説明です。

自分の説明を、**確認済みの事実**にしない。

AIには、案と一緒に、 別の見方を出してもらおう。

「案をつくって」に加えて、
自分の見立ても検討してもらいます。



方法だけでなく、**何を目指すか**も見直せる。

AIが言った。 それだけで、確認済みにしない。

資料に何を載せるかは、
元の記録や、**必要な条件**に照らして決めます。

AIの案

この期間の数字を
比べてはどうですか。



実際に確かめる

元の記録と照らし合わせる。
依頼者に、用途と条件を聞く。



判断して進める

根拠と条件を踏まえ、
何をAIに任せるかを決める。



重要な不明点が残れば、
追加の確認や相談に戻ります。

AIの案も、自分の見立ても、**根拠に照らして使う。**

☑ 記録をAIで調べる場合も、情報源との対応を確かめます。

☑ 判断と影響への責任は、人や組織が担います。

「できた」で終わらず、 結果を見る。

自分の目的は、「やり直しを減らし、早く終わること」でした。



時間

作成・確認・修正まで含めて、
時間はどうだった？



やり直し

修正の回数と内容は、
どう変わった？



品質

必要な条件を
満たせた？



他の人の負担

手直しを別の人に
移していない？

一度よくなっても、
AIや方法の効果とは断定しません。

結果をもとに、**続けることと、見直すこと**を決める。

やり直しを減らしたい。 では、どこから変えてみる？

会議資料づくりで、
ここまでの原則をつなげます。

1 記録を見る

依頼文と修正依頼を並べる。
どこで、やり直しがあった？



2 AIと整理する

事実と見立てを分ける。
次に確認することを挙げる。



4 結果を比べる

作成から修正までの時間と、
品質・負担はどうだった？



3 確かめて、つくる

用途と必要な条件を確かめる。
AIと案をつくり、内容を確認する。



「もっと速くつくる」だけでなく、「**どこを確かめるか**」を見直す。

自分の経験から、 AIと次の仕事をつくる。

最近の一仕事を選び、
依頼文やメモに、必要な項目を書き足します。

1 自分の目的

何を実現し、何を守りたい？



2 仕事の条件と範囲

何を満たし、どこまで担う？



3 確認した事実

いつ、どこで、何を確かめた？



4 見立てと未確認

どう考え、何がまだ分からない？



5 AIへの依頼と、次の確認

何を頼み、誰が何を確かめる？



6 結果と、次の仕事

何が起きた？
何を続け、何を見直す？



全部を埋めてから始める必要はありません。

まず「**自分の目的**」と「**確認した事実**」を書き出す。

お問い合わせ・会社情報



33.8万人

のデータに基づく

組織で働く成人の研究と教育開発

組織行動科学®

Organizational-Andragogy®



お問い合わせ：
判断デザインラボラトリー



E-mail：
request@requestgroup.jp

【会社情報】 リクエスト株式会社

- 本社：〒160-0022 東京都新宿区新宿3丁目4番8号
京王フレンテ新宿3丁目4F
- 会社概要：<https://requestgroup.jp/corporateprofile>
- 代表取締役 甲畑智康：<https://requestgroup.jp/profile>
- 公式サイト：<https://www.requestgroup.jp/>

【企業概要】

リクエスト株式会社（本社：東京都新宿区、代表取締役：甲畑智康）は「より善くを目的に」を掲げ、**980社・33.8万人**の働く人達のデータに基づいた組織行動科学®を基盤に、8つの研究機関からなる企業です。

組織行動科学®は組織で働く私達の思考と行動が「なぜ起こり・なぜ続くのか」を事業環境と歴史・経験から解明し、より善く再現する手段です。

リクエスト株式会社の8つの研究機関



Behavioral
Robotics®
(HOBiROA®) 総研



smart creative
management®
総合研究所



OrgLogLab®
(組織論理学®
研究センター)



XR HRD®
(AIAndragogy®)
研究センター



ABA
Operations
Research®
センター



人的資本開発
プランニング®
センター



判断デザイン
ラボラトリー



公共行動
研究室®

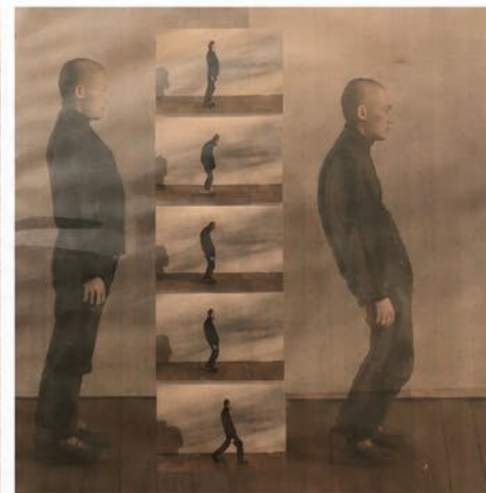
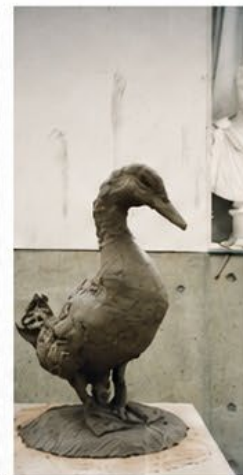
芸術実践から、 判断研究へ

代表・甲畑智康の原点 —

東京藝術大学での制作経験と、
現在の組織行動科学®・判断デザイン研究をつなぐ。

甲畑智康は、2003年に東京藝術大学美術学部を卒業し、
身体・空間・立体・素描・行為の制作を通じて、
既存の言葉だけでは捉えきれない現実に向き合ってきた。

その後、企業現場での人材育成・組織開発・判断研究へと
実践領域を広げ、現在は組織行動科学®を基盤に、
判断デザイン・判断経験設計・判断構造設計Proの
体系化を進めている。



1

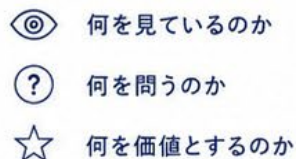
芸大時代の制作



身体・空間 立体 素描 行為

2

問いの継続



何を見ているのか

何を問うのか

何を価値とするのか

3

現在の研究・実践

- 組織行動科学®
- 980社・33.8万人のデータに基づく研究と実践
- アート思考＝判断前提生成
- 判断デザイン・判断経験設計・判断構造設計Pro

芸術の実践は、答えを急がず、
現実との関係をつくり直す経験だった。
そこから、アート思考を
『判断前提生成』として捉える
視点が生まれた。

正解がない仕事でも、 自分で判断し、前に進められる。



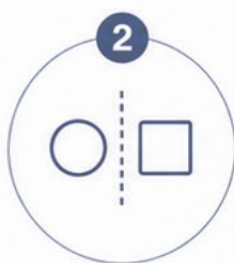
良い行動が生まれる上流には、必ず判断がある。

判断の質が、行動の質と成果を決める。



現場の事実を見る

目的に照らして、
何が起きているのかを
客観的に見る。



違いを捉える

理想と現状のギャップや
パターンの違いに
気づく。



判断する

基準に照らして、
何を優先し、何を
選ぶかを決める。



行動する

判断に基づいて、
自分で決めて
動き出す。



反応・結果を確かめる

相手の反応や結果を
確認し、事実を
集める。



判断基準を更新する

得られた事実から
基準を見直し、
精度を高める。

このサイクルが、判断できる組織をつくる。